第一部　西郷物語－幕末から維新

維新の最高の功労者が何故西南戦争を起こし、明治１０年に自滅してしまったのか、西郷隆盛については今一つ分かりにくいところがあります。ここのところを見てみたいと思います。

「幕末から維新」、「西郷下野から挙兵」、「西南戦争と名士による西郷評価」の三部作とします。今回は「幕末から維新」です。

文政１０年（１８２７）鹿児島城下で小姓組勘定方小頭西郷吉兵衛の長男として、生まれました（明治維新は１８６８年です）。

身分は城下士の下士です。薩摩藩では侍の身分に城下士（じょうかし）と外城士（とじょうし）（半農士族）分かれ、城下士は更に上士と下士に分かれます。

いくつも名前を変えていますが、西郷吉之助又は西郷隆盛が一番知られています。

「西郷どん」（NHK 大河ドラマの題名）は「せごどん」ですが地元の人が親しみを込めて呼んだのでしょう。どんは殿でしょう。

今我々は西郷さんと呼んでいることが多いと思います。

家族は、祖父母、父母、弟３人（次男吉次郎は戊辰戦争で戦死、三男従道（つぐみち）は海軍大将、元帥、侯爵、四男小兵衛は西南戦争で戦死）。

身長１７８センチメートル、体重１１０キログラム。クロダイヤのように光る大きな目玉が特徴と言われます。

一度目の結婚相手とは安政元年（１８５４）に離婚。安政６年（１８５９）、奄美大島に流されていた時に地元の娘愛加那（あやな？）と結婚し、菊次郎（京都市長）と娘菊子（従弟の大山巌陸軍大将の弟の夫人）をもうけます。

鹿児島に戻るときは単身で、その後子供二人を引き取ります。

慶応元年（１８６５）鹿児島で結婚、３人の子をもうけています。

薩摩藩には家臣の徳育のため郷中制度あって６歳から２５歳ぐらいまでその地区の郷中に属し、先輩から知育、体育を学びます。

西郷は郷中の青年の部の二才(にせ)の頭(かしら)として後進の指導を行い、若い者から慕わられ、城下でも名を知られるようになります。

斉彬(なりあきら)が薩摩藩の 28 代当主になります。西郷が農政についての意見書をだし、これが斉彬の目にとまります。

安政元年（１８５４）中御小姓、庭方役に抜擢され、斉彬の身近に仕えます。

以後斉彬に４年間家臣として仕え、師匠と仰ぎます。江戸や京で藩主や名士と交際が出来、西郷の名は全国的に知られます。

藩主島津斉彬(なりあきら)のひいきにより西郷さんの幕末での活動が始まります。

ペリーがアメリカ艦隊を引きつれて浦賀に現れたのは嘉永６年（１８５３）６月で、ここから幕末の騒動が始まります。明治維新の 15 年前です。

尊王攘夷の運動が活発化します。

斉彬は、政治的には尊王開国で、天皇―徳川将軍家の体制を守る派で、富国強兵を薩摩藩の施策とします。

科学技術、工業の発展、導入を目指します。

西郷は斉彬から政治を学びました。斉彬は主君であり、師匠でもあって、大変尊敬していました。

幕府は大老に井伊直弼(いいなおすけ)を起用します。直弼は１４代将軍に尾張徳川家の家茂を推戴し、斉彬(なりあきら)は水戸徳川家の慶喜(よしのぶ)を推戴し、両者の関係が悪くなります。

その中で斉彬は亡くなります（安政５年７月―１８５８)、５０歳。

日米通商条約でいよいよ開国です。

一方大老直弼による安政の大獄です。

西郷は斉彬が亡くなって意気消沈したところに、尊敬する同志月照(げっしょう)（比叡山の僧侶、近衛関白と斉彬派）が鹿児島に西郷さんを頼って逃げてきました。

一緒に錦江湾（鹿児島湾）で入水心中を計ります

さて何故西郷さんは心中しなければいけなかったのか、それも入水であったのかです。
月照は藩の命令で鹿児島から日向に送られることになり、錦江湾を船で向かい、西郷さんは同乗して別れを惜しんでいました。
西郷さんは、月照は井伊大老の命により日向で死罪になることを知っていました。
西郷さんは助けられないことに意気消沈して無理心中を計ったのです。
月照は亡くなりますが、西郷さん一人助かります。
月照は殺される。月照は坊主であるから切腹はできない。一緒に入水して死ぬしかないと思ったのです。
薩摩藩では幕府（井伊大老）にはばかって西郷を島送りにします（安政６年１月―１８５９）。島は奄美大島、徳之島、沖永良部島と移らせられます。

斉彬（なりあきら）に子はなく、後継は弟久光の息子忠義（ただよし）になりますが、未だ若いため親の久光を後見人とします。久光は藩父として実権を掌握します。
そして、井伊大老は万延元年（１８６０）暗殺されます。

藩父久光は幕府内での実権を得るため自ら入京、江戸への入府を画策します。
これを実行するためには外交手腕を持った西郷の力が必要との認識が薩摩藩執行部にありました。
西郷を島より召還させ，復職させます。（文久２年２月―１８６２）。

ところが久光京が向かうに当たって、京で尊王攘夷の薩摩浪士過激派が騒動を起こそうとします。
西郷さんは久光が下関で待機の命令に服さず、薩摩浪士をなだめるべく下関を立って大阪に向かいます。
久光は命令違反をなじり、又徳之島へ島送りとします（文久２年６月―１８６２）。

しかし西郷さんは元治元年３月（１８６４）、（明治維新は１８６８年）に再び召還されます。伊地知正治（いちじまさはる）（同志）や大久保利通（同志）の運動によるもの

です。久光もしぶしぶ認めます。

この後西郷さんの討幕からの維新での活躍は皆さんだいたいご存じかと思いますが、整理しながら進めましょう。

幕府・会津・薩摩連合軍と長州藩との京都での戦いです。禁門の変（蛤御門の変）と言われています。薩摩軍の指揮官は西郷さんです。長州の京追放に成功しました。

西郷さんは藩主忠義から感謝城をもらいます。

更に長州征伐では西郷さんは幕府軍と長州の間にたって長州恭順で和議を成立させます。

がらりと情勢が変わり、西郷さんたち薩摩の志士は長州と土佐の志士との間で討幕の密約をします。

京都御所での公武合体、王政復古の会議で徳川慶喜将軍の官位剥奪、所領没収を強引に決議してしまいます。

慶喜将軍は怒り、大坂城で兵を挙げますのが鳥羽伏見の戦いとなります。

西郷さんは官軍（討幕軍）の実質総大将として幕軍に勝利します。

慶喜は負けを認め恭順の意を表します。

そして官軍は西郷さんを東征軍の指揮官（実質総大将）として江戸へ向かわせます。江戸で勝海舟との間で江戸城無血開城で合意されます。

明治維新政府の樹立です(１８６８年)。

この後戊辰戦争として東北や函館での反政府勢力との闘いがありますが、明治２年初めには鎮圧されます。

維新政府で論功行賞の発表がありました。

大名や公家を別にしますと、ランク１位は西郷さん、２位は大久保利通（薩摩)、同２位に木戸孝允（桂　小五郎　長州）です。

この３人を維新の３傑と言いますが、西郷さんが一番の評価です。大将の称号は西郷さんだけです。

西郷さんはその後薩摩にもどり、政府の仕事を辞退しますが、大久保や木戸から閣僚就任（参議）を乞われて呼び戻されます。

それは大久保や木戸たちだけでは遂行できない廃藩置県の大仕事です。
廃藩置県とは、藩の廃止（２６１藩)、３府３０２県（後に３府４３県）を設定し、藩主（知藩事）は解職、知事は中央政府から派遣、租税徴収は政府が行うことです。
藩主との主従関係は無くなり、士族は改めて役人として雇われない限り失職し、藩の軍は無くなります。
これはまさに封建時代を終わらせ、中央集権国家の成立を意味します。
源頼朝の武家政権樹立から６７０年以来の革命的な政治体制に移ります。
士族の反乱が予想されます。
大久保、木戸等の政府は、中央政府軍の軍隊の成立が必要です。これまで軍は藩の軍に依存してきました。
中央軍の成立とその統帥には西郷さんでなくてはならないと彼らは考えました。
西郷さんは薩摩から兵３０００人を引きつれ上京し、御親兵（近衛師団）結成に協力してくれ、司令官になってくれました。
それでも西郷さんが廃藩置県（封建国家から中央集権国家への移行）に賛成してくれるか不安でしたが、西郷さんはあっさり賛同してくれました。
これで廃藩置県は明治４年に無事断行されました。
実は西郷さんは薩摩を出るときに藩父（藩主の父）久光から廃藩置県を認めてはいけないと釘をさされていたのですが、命令を無視しました。
西郷さんは主人の命令であろうと組織の命令であろうとその場の判断でそれを無視します。
大久保や木戸は西郷のおかげで廃藩置県を無事施行できたのです。

この後大久保や木戸はアメリカとヨーロッパに使節団として出発し、その間を西郷さんに政府の運営を任せます。

以上

２０２３年4月１５日

梅　一声